佐賀大学農学部同窓会報　第13号

ありあけ

●発行日　2014年１月１日
●編　集　会報編集委員会
●発　行　佐賀大学農学部同窓会
住所　佐賀市本庄町１　佐賀大学内
TEL 0952-23-1253　FAX 0952-25-5700
E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp
ホームページ　http://dousou.saga-u.ac.jp/

佐賀大学美術館の落成を祝う

農学部同窓会会長　**金　丸　安　隆**

平成25年９月28日に佐賀大学と佐賀医科大学の統合10周年記念事業として佐賀大学美術館の落成式が挙行されました。この美術館は２階建の総ガラス張りで明るく、展示室には大学が所蔵する作品等の展示、スタジオは講演会やワークショップの開催など多目的に活用、さらにカフェーでは軽食をとることができます。これから教育・研究の有意義な活用さらには地域・社会にも活用されていくものと期待しています。

この美術館建設に伴い農学部卒業生の多くの皆様から総額215万円のご寄付をいただき厚く御礼申し上げます。卒業生の皆様も一度は見学していただきたいものです。

さて、昨年度より農学部同窓会の大きな事業目標としている佐賀県内で働く卒業生の組織化についてです。すでにご承知のとおり県内には５つの支部があります。県庁、教職員、農協、自営者、OB の５支部です。この５支部以外に民間企業や行政官庁に勤務されている現役の卒業生が約300名おられます。この多くの卒業生の皆さんが何らかの形で交流を深めるための支部作りを検討してきましたが、現在の所、県内を６ブロックに分けての地域支部作り案を検討しています。これからさらに関係者のご意見を聞きながら推進して参りますので、よろしくご協力の程をお願いいたします。

農学部同窓会の組織活性化取組みについて

副会長　川　副　　操

昨年の総会で議決された、同窓会組織活性化の作業状況を整理してみると以下のとおりとなっています。これまでの経緯として

○平成24年２月頃、名簿整理の折、農学部同窓会県内５支部（県庁・教職員・JA・自営者・OB）に未加入の卒業生多数が判明

○未加入者の組織化を同窓会の重点目標に決定（まずは県内在住約300名への取り組み）

○アンケート調査の実施を決める

○行政関係・企業関係にそれぞれ仕分けし、組織化への協力者を選任(白武･有馬･光富先生より推薦)

○平成24年９月、未加入者の内、既にOB56名･教職者35名及び協力予定者34名へアンケート調査実施(調査結果、OBからは約２割の回収率（12名）となったものの、教職者は２名・協力依頼者は４名（うち協力２名))

上記のとおり平成24年度は期待した成果は得られなかったものの、10名もの前向きな回答が得られたし、更に佐賀市役所が全学同窓会支部を立上げ（平成25年２月）られたことは、農学同窓会のこうした取り組みが機運盛上げに繋がったのではとも考えられる。

さらに今年度に入って

○平成25年８月、組織強化委員会を同窓会事務局内に立上げ、今後の取り組み方針を検討

・昨年選任した34名の協力予定者へ再度の協力呼びかけ

・既存支部への参加か新支部の設立か？

・新支部の場合、各団体・事業所単位か同業種関連単位か？

・又県内の市郡単位等の地域ブロックではどうか？

○８月、34名へ再度の協力呼びかけを行うも、回答者２～３名と不調

○11月（予定)、同窓会若手理事を交え、委員会の拡充を図って今後の作業方針を検討

・県内を６地域化してブロックごとに交流促進してはどうか？

・今後検討会を毎月１～２回開催

等を考えています。

以上、今日までの経緯を述べたが、今後同窓生相互の交流・親睦を深めていくことは非常に重要なことと考えますので、皆様方の意見を拝聴しながら組織の活性化に努めてまいります。会員皆様のご協力をよろしくお願いします。

北川行俊氏へ感謝状

農学部同窓会表彰規定に基づき、佐賀県支部（支部長　坂本隆昭氏）から表彰候補として北川行俊（農学科　園芸学専攻　昭和37年卒業）氏の推薦がありました。このことについて平成25年４月24日の役員会で審査され、表彰に該当することが満場一致で決定しました。

北川氏への表彰は、平成25年度の総会（平成25年５月18日）の折、川副副会長から感謝状が授与されました。

北川氏は本会発展のために幾多の貢献をなされていますが、その主な功績は下記のとおりです（推薦書から抜粋)。

1．北川氏は平成18、19年度の一期２ヶ年間農学部同窓会長を務められた。

2．その間、農学部同窓会の情報発信の強化のため、情報紙の発刊に尽力され、平成19年12月１日には新たな同窓会報「ありあけ」が発刊されることになった。

3．更に、これまでの同窓会組織では佐賀県内退職者の受け入れの組織がなかったので、その組織化に取り組まれ、氏の熱意により平成20年２月１日農学部同窓会佐賀県支部の設立総会が開催され、毎年退職者会員の親睦の場として発展を遂げている。

農学部研究室紹介　その⑨　生命機能科学科　食糧科学講座　食品化学研究室

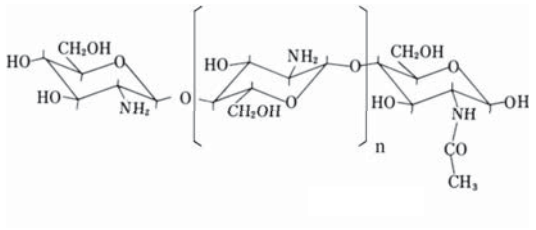
生命機能科学科　食糧科学講座　食品化学研究室　光富　勝 教授
生命機能科学科　食糧科学講座　食品化学研究室　関　清彦 講師

食品化学研究室は平成18年に、それまでの食糧化学研究室と生物資源化学研究室が一緒になりスタートしました。本研究室のスタッフは、光富　勝と関　清彦の２名です。平成25年度の学生は修士３名と学部生14名（４年生が６名、３年生が８名）です。短期留学生として在籍していた２名の留学生（中国１名、タイ１名）は８月に帰国し、大学院進学の準備をしています。

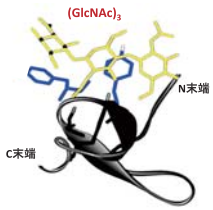
現在取り組んでいる主要な研究テーマは、１）キチン質分解酵素の構造と機能および利用、２）糖質分解酵素を利用したオリゴ糖の酵素合成、３）抗真菌物質の探索と開発に関する研究などです。カニやエビなどの甲羅に含まれるキチンを分解して得られるキトオリゴ糖には、抗腫瘍活性、免疫賦活活性、エリシター活性や細菌増殖抑制など様々な生理機能が報告されています。また、調味、増粘、抗菌、難消化、整腸などの機能を持つ食品素材としてもその利用が期待されています。これらの様々な機能をもつ糖質を、微生物が生産するキチン質分解酵素を使って調製する方法を開発しています。

また、植物種子に含まれているキチン結合性抗真菌ペプチドの構造解析も行っています。さらに遺伝子工学的手法を用いた構造改変を行い、それに伴うカビに対する作用の変化をみて、どのようなメカニズムで抗カビ作用が起こるのか調べています。穀類であるアマランサスやキノア種子中に含まれる抗真菌ペプチドは、芳香族アミノ酸が抗カビ性に重要な役割を果たしていることがわかりました。抗真菌ペプチドの構造と機能の関係を明らかにし、有用な抗カビ剤の開発を目指しています。

研究室の卒業生は、食品会社、製薬会社、佐賀県職、銀行、JA、検査機関などに就職し、幅広い分野で活躍しています。



モノ-*N*-アセチルキトサンオリゴ糖



キチンと結合する
Ac-AMP2のモデル

アマランサス由来キチン結合*Ac*-AMP2の抗真菌活性

平成二十四年度　食品化学研究室

職場では今

佐賀県内農業系高校の取り組み（その１）

県内５つの農業系高校では、「農業後継者の育成（担い手の育成）」、「将来のスペシャリストの育成」、「国際競争を見据えたグローバルな人材育成」の３つの柱により、以下のような農業の専門教育を実践している。

１　農業後継者の育成（担い手の育成）
「未来さが農業塾」の立ち上げ

農業界と教育界が連携した地域農業を担う人材の育成を目的として、平成21年より若手農業後継者育成プログラム「未来さが農業塾」を立ち上げた。平成25年度も農業系高校から44名の生徒が塾生として参加しており、①農家等での実技研修　②６次産業化・起業家研修　③佐賀ブランドの研修　④就農意欲の喚起（仲間つくり）⑤経営力・科学力育成等、地域の農業後継者は地域で育てるということをコンセプトに充実した研修を展開している。

伊万里市大川町ナシ農家視察研修

２　将来のスペシャリストの育成

（１）ブランド化事業

県教育委員会の事業として、平成21年度から23年度の３年間で、生産物の商標登録や佐賀県庁における農業系高校（５校）の生産物の販売会を実施した。

①商標登録

希少価値の生産物に商標登録で付加価値をつけ販売する。21年度から23年度までの３年間で10件の商標登録を行った。

②農業系高校フェスティバル（生産物販売）

８月下旬に佐賀県庁県民ホールで学校生産物の販売会を毎年実施している。多くの県民が訪れ大盛況である。この他、JA 農業まつりや各種のイベント会場、ゆめタウンや博多阪急デパートでの販売を実施している。

（２）各種表彰

①第２回全国農業高校お米甲子園
「金賞」品種：天使の詩　　佐賀農業高校

②第１回“さが”地産地消コンテスト
「優秀賞」金香ちゃんジャム　高志館高校

３　グローバル人材の育成

国際感覚を磨き、国際競争を生き抜く、グローバルな視野を身に付けた農業後継者、農業指導者を育成するために、佐賀県との連携により平成24年度から以下のような事業を行っている。

（１）海外農業事情研修旅行を実施（農業系高が参加）

平成24年度
　オーストラリア　　６日間（10名）
平成25年度
　オランダ・ベルギー　８日間（12名）
　オーストラリア　　７日間（10名）

（２）佐賀農業高校

平成24年度
　韓国交流事業　　３日間（10名）
平成25年度
　中国貴州省派遣　　５日間（５名）
　韓国留学（全羅南道）　３ヶ月（３名）
　韓国交流事業　　３日間（12名）
　オーストラリア留学　　３ヶ月（３名）
　※１名伊農林

（３）高志館高校

平成25年度
　韓国交流事業　　３日間（10名）

オランダ・ベルギー海外農業事情研修
アムステルダム市内のトマトワールド施設見学

青木久生（Ｓ58年卒・蔬菜花卉）

佐賀県内農業系高校の取り組み（その２）

農業系高校の取り組み（その１）で取り上げた、将来の佐賀県農業を担う若手農業後継者育成教育プログラム「未来さが農業塾」について平成25年度の取り組みを紹介する。

１　入塾式・研修（５月10日）

（１）入塾式

佐賀県農業試験研究センター講堂にて、教育委員会学校教育課、生産振興部、農業大学校、農業会議、農協中央会、県内JA、農協青年部、指導農業士会、農業青年クラブ連絡協議会の方々に出席いただき入塾式を開催した。

４年目となる今年は29名が入塾、合計44名で活動している。

塾長である佐賀農業高校の山口郁雄校長より「同じ志を持つ仲間と切磋琢磨して就農への意欲を高めてほしい」と激励された。

入塾式での代表者宣誓

（２）若手農業経営者による講話

（３）農業大学校での野菜、果樹、花卉、畜産分野別研修会

２　第１回例会（６月11日）
伊万里地区管内

（１）ナシ・キュウリ農家視察研修

（２）JA伊万里選果場、青果市場視察

ピザ作り体験

（３）ピザ、パン作り体験

３　宿泊研修（８月１日、２日）

１日目

（１）佐賀県農業大学校のオープンキャンパス「緑の学園」に参加：農業大学校生との交流と実習体験

農業大学校での実習体験

―宿泊先である中村学園セミナーハウスへ移動―

（２）塾生同士のスポーツ交流

２日目

（１）全体会：講話

（２）分科会：若手農業者との部門別交流

若手農業者との部門別交流

４　第２回例会（９月19日）

（１）佐賀大学農学部での食味分析研修
佐賀大学農学部生命機能科学科教授　林信行先

食味分析実験

生より、「食品のおいしさ」にかかわる諸要因について具体的な見地から高校生にもわかりやすい講義をいただいた。また、今回は味識別装置を用いた食味分析の結果と官能検査の比較検討を行うことで、科学的な視点から「食品の味」を考える力を養うことができた。

現在、卒塾した生徒の進路は、約半数が農業大学校進学、約４分の１が４年制大学進学、残り４分の１が関連産業及び就農となっており、全体の４分の３が進学を志し、より高い農学の知識習得を目指しているのが現状である。そのため、大学の研究の一端を知るきっかけにもなった今回の研修は、大学進学の意欲にもつながったと感じている。

5　第３回例会（10月23日）
杵島藤津管内

（１）施設野菜農家視察

JA 育苗センター視察

（２）JA 育苗センター視察

（３）須古寿司とテンペを使ったおかず作り研修

塾生は白石町内の育苗センターや大規模花卉栽培農家を視察し近代化した生産システムや農業経営のノウハウを学んだ。

また、郷土料理の調理体験では、白石町特産である大豆を発酵させたテンペを使った料理などの実習を行った。

6　修了式（12月13日）

（１）塾生報告会

今年度開催した各例会と宿泊研修並びに海外農業事情研修報告を塾生が行う。

（２）修了証書授与・塾生スピーチ

以上のように、講義・講話・見学・実習などを織り交ぜながら、年間４回程度の例会を実施した。その中で、今回初めて佐賀大学農学部とも連携した農学に関する講義・実験実習を取り入れたことで、科学的な視点を持つ農業後継者及び関連産業従事者の育成につながればと考えている。

最後に、農業系高校に学ぶ生徒を地域の農業の担い手や産業人として育てるため、県内関係機関にご協力いただいていることに感謝します。

松尾信寿（Ｓ62年卒・果樹）

在学生支援活動

その１　キャリアデザイン講座

全学部在学生を対象とした25年度・キャリアデザイン講座（２単位）の農学部同窓生担当の講師として、平成25年11月27日には日本農薬（株）・徳淵菜央（H13年卒・遺伝資源）さんが、在学時の勉強や就職活動、実際の職場での状況を交えて、在学生に就職に向けての要点を語られました。

その２　就職ガイダンス

平成25年11月27日、12月18日に農学部３年生および大学院修士課程１年生を対象に講師自らの職場紹介をとおして、就職に関するアドバイスをなされました。

講師は、山崎パン・向井賢吾（H21年卒・応用微生物）、木原理沙（H25年卒・食品化学）、佐賀県西松浦農業改良普及センター・岩城雄飛（H17年卒・作物形態生理）、佐賀県伊万里農林事務所・山田修平（H10年卒・遺伝子工学）、宮島醤油・中島皓子（H21年卒・育種）、中原採種場・山崎美里（H25年・蔬菜花卉）、熊本県八代地域振興局・徳永智子（H15年・浅海干潟）、JA 佐賀・小池良美（Ｓ56年卒・農業経済）、高嵜智美（H23年・食品化学）の９名でした。

会員の広場

南通学院便り　その２

金丸　安隆

（農学部同窓会　会長、Ｓ43年卒・畜産）

２学期の開始に伴い、２月23日に佐賀空港から家族や知人に見送られて上海に降り、妻と２人バスで南通に向かう。やっと２人でバスで行けるようになる。25日から授業だ。２学期は16時間で、新しく１年生に「日本文化体験」と２年生に「作文」の授業が入る。しかも、両科目とも２クラス合併で人数も50人と多い。ここで大きな問題があることに気づく。「日本文化」は４年生大学では３年生時に学ぶ。「作文」も３、４年生時に学ぶ科目だ。

さて、１年生は私の日本語を１割位しか理解できないから、日本語による「日本文化」の説明は難しい。そこで学校の先生と協議の結果、絵やイラスト、写真を使い、簡単な説明文を日本語と中国語で書いたパワーポイントを作ることになった。それに補足して私が日本で撮影した写真を各月に編集し併行して見せることにした。

文化行事の漢字は難解な言葉が多い。たとえば、初詣、お節料理、節分、端午の節句、お歳暮などなど。

さて、南通の生活について、学校は住宅から歩いて15分、１日２往復はするから１時間は歩き、良い運動になる。また、授業中はほとんど立っているから運動量に問題はない。

住宅の周辺はまだいくらかは畑があり住民は佐賀で栽培しているような野菜を熱心に作っている。

今はトマト、キュウリ、ナス、インゲン豆、トウモロコシ、大豆、里芋など。市場までも近く、家内は買い物に行く。野菜、肉、果物など種類も豊富。特に江蘇省の米はおいしい。私も神埼では「佐賀日向」「一目ぼれ」「ヒノヒカリ」など食べているが遜色ない。また生の豆腐もおいしい。これは神埼のより柔らかくておいしい。もともと豆腐も中国原産だ。また湯葉など豆乳からできる加工品が多いから嬉しい。

果物の種類も多くしかも安い。季節により種類も変化していく。３月はサトウキビが多い、歯が弱いので搾ってもらったものを飲む。黒砂糖のような独特の味だ。今はマンゴーを毎日食べる。日本では１個2000円以上するものが１個200円と安い。独特の甘い味。サンシュウ（山竹）と言って形は柿に似ている、厚い皮をとると真っ白なニンニク様の果肉が入っており、これが甘酸っぱくてなんとも言えない。高級果物だ。また、レイシ（れい枝）も今が旬で、甘くてみずみずしい。これは楊貴妃だけが食べていたと聞く。

今までに学校の先生の実家にお誘いを受けた。２カ所の実家は農家であり、行く前から興味を持っていた。車で１時間位、その時期は麦あり、菜の花あり。実家の両親や祖父母の皆さんに暖かく迎えて頂く。農家の家は総２階建てで広い。家に入ると居間というか応接室が広く、隣接して台所、寝室、２階にはさらに広い居間や寝室がある。電化製品もそろっていて、驚くばかりである。

昼食には手作りの中華料理をご馳走になる。家にはアヒルや鶏、山羊もいる。１農家あたりの所有地は20、30ａ位と少ないようだ。近くに親戚も住んでおられる。久しぶりに農村を見て心身共にのんびりする。

ここで生活していると思わぬことが多くあった。2005年に江西省の景徳鎮学院で教えていた学生が３年前に卒業していた。その卒業生が上海から南通に訪問してくれる。私は６年ぶりの再会でありとても嬉しかった。これを契機に上海に行くと上海にいる卒業生が10名位集まり会食会を開いてくれた。皆、社会人ではあるが面影は残っている。その卒業生と香港に旅行すると香港やシンセンに働く卒業生が集まってくれた。学生の成長と再会の喜びは教師冥利に尽きる。

その後も卒業生が南通を訪問してくれたり、なんと南通市で働く卒業生もいて再会を喜び合った。

私はこの６月で契約を終わるので、中国の広大な東北部（ハルピン、長春、沈陽、大連）を観光し、大連から帰国しました。

この１年間、会長在任でありながら、中国行きを承認いただいた役員の皆様に感謝申し上げます。

「奥州道を走る自転車一人旅」と題する旅行記が古川辰馬（S40年卒・育種）氏から寄稿されましたが、紙面の都合でその一部を掲載します。全文の閲覧は「佐賀大学同窓会ホームページ・農学部同窓会・会員の広場」でお願いします。または、同窓会事務局へお尋ねください。つづきは、農学部同窓会ホームページ「会員の広場」をご覧ください。

「奥州道を走る自転車一人旅」

古川　辰馬

（S40年卒・育種）

1　はじめに

自転車に乗り始めて約８年になる。初めのうちは市内近郊を走り回る程度だったが、毎月、目標を決めて一定の距離を走っているうちに走行距離も次第に伸び、走り始めて２年目の頃には一泊二日で隣県にも足を延ばせるようになった。そして、いつの頃からか、自転車で日本列島を縦断してみたいと思うようになり、一昨年、佐賀から京都を、昨年、京都から東京を走り、ついに今年は５月下旬、東京から青森を走り終えたところである。今回の旅は、予定の全行程（８日間）を好天下で走るという、願ってもない幸運に恵まれ、途中トラブルらしきことはなかった。自転車の一人旅を積み重ねる中で得た情報やノウハウ、旅で感じた想い等を自転車旅行に関心ある人に伝え、参考にしていただければという思いでこのレポートをまとめた。

2　コースの選択等

東京から青森へ通じる幹線道路の一つ、国道４号線は旧奥州街道に沿って走っている。奥州街道は、江戸の５街道の一つで、東京（日本橋）～宇都宮～白河～福島～仙台～平泉～盛岡～青森市～津軽半島の三厩（みんまや）に至る日本最長の街道（全長980km)である。太平洋岸の東北地方主要都市はこの街道（４号線）上に位置しており、初めて東北を走る者にとって最も分かりやすいコースだろうと考え、４号線（可能な限り旧道も）を走ることに決めた。一部、青森では、４号線から外れて八戸で宿泊したが、概ね計画通りに走ることができた。日程、コース等は以下のとおり。

（東北道自転車一人旅・行程表）

月日	出発地	到着地	走行距離（km）	備　　考
5月20(月)	佐賀空港	羽田空港	—	佐賀15:25→羽田16:55　泊:橋詰(娘)宅
21(火)	東京	宇都宮市	125	西日暮里～小山～栃木市～宇都宮
22(水)	宇都宮市	郡山市	127	宇都宮～大田原～那須～白河～須賀川～郡山
23(木)	郡山市	福島市	53	午前中、輪行で郡山～会津若松往復、午後福島へ
24(金)	福島市	仙台市	102	福島～白石～名取(震災地関上地区へ)～仙台
25(土)	仙台市	一関市	106	仙台～古川～一関～平泉(中尊寺)～再び一関
26(日)	一関市	盛岡市	108	一関～北上～花巻(宮澤賢次記念館)～盛岡
27(月)	盛岡市	八戸市	123	盛岡～岩手町～一戸～二戸～三戸～南部町～八戸
28(火)	八戸市	青森市	134	八戸～六戸～十和田～七戸～野辺地～青森
29(水)	青森市滞在(昼から雨)		46	午前中、津軽半島蓬田(よもぎだ)村往復
30(木)	新青森→東京(新幹線)		—	新青森12:30→上野16:00　泊:橋詰宅
31(金)	東京滞在		31	自転車で葛飾柴又～スカイツリー～上野公園他
6月1(土)	羽田空港	佐賀空港	—	羽田12:35→佐賀14:26
走行距離計			955	

3　道路事情

ロードバイクは、細いタイヤに高い空気圧をかけ、タイヤの接地面積を小さくすることで、効率的に走れるようにできている。従って、路面が良ければスイスイと高速で走ってくれるが、路面が悪いと車体がガタガタゴトゴトと踊り、乗り心地は最悪となる。交通量の多い４号線には、路面の悪いところもありはしたが、全体としてみればよく整備され走りやすかったと言える。最近整備された道路は歩道部分が広く、路面も滑らか。このような道路では周辺の景色を十分楽しみながら走ることができた。

奥州道１（平地：栃木県さくら市付近、歩道がよく整備されていて、走りやすい）

奥州道２（山間地：岩手から青森へ超える中山峠、国道４号線の最高地点：458m）

王維の詩と西遊記の故地を訪ねて

高木　胖（S36年卒・育種）

「渭城の朝雨軽塵をうるおす…」の陽関を訪ねました。王維の詩は「客舎青青柳色新たなり、君に勧む更に盡せ一杯の酒、西のかた陽関を出ずれば故人無からん」と続きます。長安（西安）の郊外渭城で詠まれたものであり、西域の果てタクラマカン砂漠に入った者は二度と会えないだろう、西域に赴任する友を送った離別の詩です。敦煌から南西約70kmの所に陽関遺跡があります。西域南路への出口となる関所があって唐時代の烽火台の跡が残っています。「空に飛鳥無く、地上に走獣無し、行路を求めても見わたすかぎり拠り処がなく、ただ死人の枯骨を標識とするのみ」（法顕伝）、茫漠・荒涼たる荒野が広がっています。前漢の外交官張騫、漢の軍人霍去病、斑超が、インドに仏典を求めて法顕と玄奘が熱砂の砂漠へと旅立った故地です。

敦煌をさらに西に400kmを行くとトルファン市があります。山の麓から20～30mの間隔で井戸が掘られていてカレーズと呼ばれる地下灌漑水路（暗渠）が設置され、水は地上水路（明渠）を流れ、ブドウ、モモ、ハミ瓜、西瓜が育っています。玄奘三蔵が天竺へ向かう折に１カ月間滞在したという高昌故城趾が、仏教を講じたという日乾レンガ造りの講堂が再建されています。焚き木にするのでしょうか？「根付きの流木」と厚い砂とが農家の屋根に積み重なっています。天山山脈からの水はこの辺りは既に使い切っており、小石混じりの流れの跡のみを残して砂漠の中に消えてゆきます。「生きてゆく」のはとてもすざましい光景です。

トルファンには西遊記で有名な火焔山があります。孫悟空が天界を騒がせ捕らえられ（孫悟空大鬧天宮）、八卦炉から脱出した際に火は地上に落ちて火焔山となりました。八卦炉の番人であった牛魔王は天界から追放され、いっしょに「駆け落ち」したのが羅刹女です。火焔山の火を消すために「芭焦扇」を巡る牛魔王との争いがあって（唐三蔵路阻火焔山）、孫悟空が羅刹女を「お義姉様」と呼ぶと、「お猿の親類はいない」と答えるなど、コミカルな言葉のやり取りがあって面白い。絵空事とは言え、西遊記では金角・銀角の兄弟愛と供に大好きな演目です（大聖騰那騙宝貝）。トルファンの夏は最高気温が50℃以上にもなり、私が訪れた６月24日では40℃を越える暑さでした。火焔山はタリム盆地の北側ほぼ100kmにわたって屏風のように連なっていて、高い気温と赤い岩肌が揺れる様子は、まさに燃え上がる火焔そのものです。

嘉峪関は、東の渤海湾を望む山海関から始まる

21,196km以上に及ぶ「万里の長城」の最西端に位置する第一の雄関です。最盛期には２千人以上の兵士が屯田をしながら防備をしていました。明の時代に建てた懸壁長城からは嘉峪関市が遠望できます。嘉峪関は砂漠にあるオアシス都市で、半分が農業、半分が製鉄所とセメント工場で、酒鋼という企業城下町です。砂塵ならぬ「噴煙がもうもう」で、工場からの大気汚染が激しい。目は乾き、喉も痛くなります。酒泉の「花苑大酒店」では工員達が宴会を開いていました。20卓以上もテーブルがあり（８人で一つのテーブルを囲みます）、20～40歳代の男女が酒を飲んでいます。高度成長期の日本に似た雰囲気です。我々は２卓を占有し、葡萄の美酒“夜光杯葡萄酒”を飲み、「葡萄の美酒夜光の杯　飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す　酔うて沙場に臥すとも君笑うことなかれ　古来征戦幾人か帰る　（涼州詞　王翰）」の気分です。高揚と喧噪があって、若者の飲む“高粱の酒”の勢いにはとても抗すべくもありません。「ある者は十五歳にして北に送られ川を防衛し、ある者は四十にして西に送られ川を防衛し、ある者は四十にして西に送られ屯田をする、……　まことに知る　男を生むは悪しく、反って是れ女を生むは好きを、男を生まば　埋没して百草に隨はん」は、杜甫の詩「兵車行」にある一節です。嘉峪関市では２万人以上の技術者（工員）が遼寧省から移り住んだといいます。酒を飲んでいるのは「万里の長城防備」の21世紀の兵士達です。

シルクロードは長安（西安）から２万キロを旅してイスタンブールで終わります。今回は、起点となる西安・西城門からウルムチまでの2600キロの旅です。新疆ウイグル自治区の天山山脈の周辺は宝の山です。露天掘りの石炭があって、鉄、銅、レアーアースが採れます。恐竜の化石も石油も出ると聞きました（較べて、佐賀の天山は掘り尽くした炭坑の跡だ

けです)。(砂漠を突切っての) 新幹線は建設中であり、2015年には西安－ウルムチ間の高速鉄道が開業とか。タクラマカン砂漠、桜蘭近くのロプノールでは大気圏内核実験が行われており (1964年から1996年までに46回も行われた)、「核の砂」は流れて、トルファン、ハミ、敦煌の周辺都市に大きな影響を与えました。米国の科学雑誌「サイエンティフィック・アメリカン」の記事によると (2009. 7. 30)、19万人ものウイグル系住民が死亡した可能性があるとしています。たえまない漢族の移住、資源の収奪による民族浄化が続いています。“正義が行われた (秩序が守られた)” は、組織化された暴力によって勝利した者の視点に立つ記述です。滅ぼされ、砂漠に消えて行った人々の真実の声が聞きたいものです。

魚釣島の国有化で日中関係がおかしくなり始めたころ、中国国慶節の大型連休ではラクダの“過労死”が報道されていました (2012. 10. 8)。ラクダに乗って敦煌・鳴沙山の砂漠観光があります。毎日８千人近くの客が押し寄せたために、朝６時頃から夜の10時頃まで歩き続けたラクダもいたとか。報道では、休むことなく働かせたことで連続してラクダが死んだといいます。鳴沙山のラクダは、日本の動物園で見るような“噛みつき”とか“唾吐き”の注意は皆無でした。女優の松原智恵子さん“そっくり”の優しい目をした、とてもフレンドリーな若いラクダさんばかりです。今どうしているのでしょうか？　心配です。

中国の環境汚染はすごい。政府公認の「ガンの村」(河南省沈丘県東孫楼村) もあります。汚染対策はもちろん、国民への健康対策もこれからです。妊娠３ヶ月体型の人が目立ちます。将来を展望した戦略では、メタボとか糖尿病治療に特化したチエーン店 (病院、リハビリ・介護の施設) を建てたら儲かるぞ～　使い捨ての「紙おむつ」も売れるぞ！　が、腹いせのビジネスモデルです。ちなみに、日本の高齢化は進み、「紙おむつ」の生産は「老人用」が「赤ちゃん用」を上回るまでになっています。ガイドさんは、(中国の一人っ子政策で) 結婚した娘は「４人の年寄りの面倒」を見ている。(年寄りは長生きをするので)「孫が面倒を見るのは８人だ！」と笑って言います。中国のこれからは大変そうです。

「陽関遺跡」から見る タクラマカン砂漠

火焔山と三蔵法師のご一行

支部だより

佐賀県庁支部の総会開催

佐賀県庁支部では、10月２日に佐賀市内「グランデはがくれ」で平成25年度の総会を開催いたしました。参加者は42名 (全会員224名) と、少なかったのが残念でした。また、来賓として、農学部同窓会長　金丸安隆氏・副会長　白武義治氏に出席いただき、佐賀大学農学部の近況をご報告していただきました。

平成25年度の新入会員は、中野裕一郎 (佐城農業改良普及センター)、池田亜紀 (農業技術防除センター)、岩永華帆 (生産者支援課)、高木智成 (茶業試験場)、古賀咲江 (道路課)、安永良介 (東松浦農業改良普及センター)、前田貢輝 (畜産課)、平石奈緒美 (武雄農林事務所)、楠田浩希 (伊万里農林事務所) の９名です。ここ数年では多い新入会員となりました。

総会終了後の懇親会では、金丸会長、白武副会長を交え議論花盛りとなりました。この元気さと熱心さがあれば、ますます佐賀県が発展することと思います。

また、平成25年３月13日にグランデはがくれにおきまして、24年度先輩を送る会を開催し、小野原虎彦氏 (生産振興部)、東嶋修氏 (佐城農業改良普及センター)、吉岡秀樹氏(三神農業改良普及センター)、脇部秀彦氏 (上場営農センター)、杉町信幸氏 (鳥栖農林事務所) の５名の先輩方の卒業を現役会員(会員出席　60名) でお祝いいたしました。

椎藤謙二 (Ｈ２年卒・育種)

熊本県庁支部（25年度）

熊本県庁佐賀大学農学部同窓会の平成25年度総会を、平成25年８月３日㈯に「熊本交通センターホテル」で開催しました。本年度は総会の前に、立場会長の思い入れとご尽力により、昭和53年佐賀大学農学部（農業経営経済学）卒の平尾豊徳氏（Ｓ53年農林水産省入省、消費・安全局長、経営局長を歴任、現在（独）農林漁業信用基金副理事長）を講師にお招きし「農業を取り巻く情勢と熊本県農業への提言」と題しご講演をいただきました。

講演会並びに総会には会員27名のほか、佐賀大学同窓会本部から川副操副会長、白武教授及び有馬教授に駆けつけていただき、また、熊本県庁楠葉会、農業高校同窓会、JA 関係同窓会他からも出席をいただき、総数39名の近年では最多の出席者数となりました。

講演会では、我が国の農業情勢を詳細なデータにより説明され、攻めの農林水産業の展開方向等について貴重なお話を伺いました。同窓に農水省幹部がおられることの心強さを感じながら皆話に聞き入っていました。

その後の総会では、役員改選があり、新会長に高松孝行氏（52年卒、作物）、副会長に小牧孝一（54年卒、応動）、監事に山中孝一氏（54年卒、応動）、事務局に坂本豊房氏（平成10年卒、細胞）を選出しました。

総会後は懇親会に移り、平尾氏を囲みあるいは久しぶりの出会いに話を咲かせながら、飲んで食べて熊本の夏の夜を楽しみました。外では恒例の火の国まつりが催され、それに負けないほど盛り上がったひと時でした。

小牧孝一（Ｓ54年卒・応動）

「農業自営者の会」　近況報告

佐賀大学農学部同窓会「農業自営者の会」が、産声を上げたのは平成９年２月１日のことである。発起人代表３名、村岡高芳氏（Ｓ33年卒）、武藤賢蔵氏（Ｓ39年卒）、野口好啓氏（Ｓ41年卒）の連署で設立趣意書が提出されました。その設立総会には正会員18名、準会員14名（田中典幸先生、陣内義人先生、岡本悟先生、藤條純夫先生等）、計32名の参加がありました。農学部の先生方も準会員として出席頂き、農業自営に取組む多くの同窓生が参加しました。その初代の会長に現在 JA さが副組合長の野口好啓氏が就任された。組合員の幸せ作りの旗振り役として農協役員の責務を果たされている。農業自営者の会も既に18回目を迎え、平成25年度の総会（例会）に向けて準備を進めているところです。

さて、今、TPP 交渉も大詰めを迎えている。11月５日の参院農水委で重要５分野の一つとしている主食用米の関税率778％を500～600％に引き下げることを固めたとの報道が取り上げられている。TPP が決議され、農産物の自由化率95％になれば、農業の基盤は崩壊しかねない。さらに、米の生産調整（減反）の18年度廃止、調整参加者に交付される米の定額助成金を14年度１万5,000円から5,000円へ削減、主食米から飼料米への変換を促すための政策的助成金の積み上げ案等、制度の見直し案が次々に新聞紙面を埋めている。

TPP 決議の行方を見据えて、持続する農業を守るために、農業者の不安や怒りを外に向け発信していくことは、浄財を頂いて学んだ「農業自営者の会」会員の責務でもあると考える。以上、近況報告に代えたい。

農業自営者の会　代表　山田和由
（Ｓ49年卒・農業経済）

佐賀大学農学部・同窓会意見交換会を開催

農学部同窓会では、12月２日に菱の実会館において、佐賀大学農学部と同窓会の意見交換を開催し、大学との連携の更なる強化を図りました。主な内容は次のとおりです。

１．農学部の現状と今後の取組
【農学部渡邊学部長・各学科長から】

農学部の大幅な改組から６年目を迎えた。

現在、日本の大学は改革の時期にさしかかっている。社会の中で大学がどのような役割を果たすべきなのか今一度、問いたださなければならなくなっている。

そのような視点から佐賀大学農学部をあらためて見直してみると、学生の約８割は北部九州出身で、また約８割が九州内に就職しており、地域の人材を教育し、地域の発展につなげる役割を果たしてきていると考えている。

更に今後は、アジアなど国際展開できるようなグローバルな人材の育成も視野に入れ、農業版 MOT 講座などを通して、経営感覚を強く持った農業者や、他産業従事者、銀行など資本の投資という視点を持った方などの社会人と一緒になって、新しい農業の発展について学ぶような取組も行っているところである。

研究分野的に考えると、最近品種登録されたカンキツの「サガンルビー」、大豆の高オレイン酸品種「オレリッチ」など、これまでどおり品種開発の面で、地域の特産物作りや機能性の高い加工食品づくりでの地域への貢献を果たしてきているほか、今後は先日発表された、唐津市、佐賀県が中心となって設置することになった「ジャパン・コスメティックセンター」などにも積極的に関わって、付加価値の高い化粧品産業との連携など新しい分野にも取組を拡大していきたいと考えている。

昨年、再編充実させた「アグリ創生教育研究センター」については、知（地）の拠点整備事業として、平成25年度から５年計画で更なる施設の充実を図っていくことにしていて　・機能性食品の開発　・アグリ医療（認知症、発達障害、うつ病患者等への家畜とのふれあいや、植物栽培を通じた癒し効果の実証）などの研究開発に取り組むほか、更に他の学部との共同による社会ニーズに対応した新しい研究分野の開拓にも取り組んでいきたいと考えている。

これからの佐賀大学発展のキーワードは、「地域とともに発展し続ける大学」ということになると考えているので、県内の農業者や産業界のニーズを的確に把握し、積極的に研究分野に取り入れ、地域に有用な成果を出していくことだと考えている。そのためには、県内企業の社員や卒業生に学校により多く来てもらうことが大切だと考えており、これまで以上に同窓会と学校とのつながりを強化していく必要があると考えている。

２．同窓会の主な取組について
【同窓会執行部から】

同窓会では、会員である卒業生をはじめ、在校生、学校のニーズに合わせさまざまな事柄に取り組んでいる。

◆主に学校向けの取組
- 記念行事（美術館建設や10周年ごとの記念行事など）
- MOT 講座の支援
- 学校と同窓会との意見交換

◆主に在校生向けの取組
- キャリアデザイン講座
- 就職ガイダンス
- 同窓会長賞の授与

◆主に卒業生向け
- 会報「ありあけ」の発行
- 記念講演会・ミニコンサートの開催
- 同窓会関係支部への支援

また、このほかに今後の重点的な取組として、県内在住者で、参加しやすい支部がない卒業生に対して、企業・市町役所などの業種別や市郡ブロック別で新たに支部を設立するなどして、卒業生どうしの結束を強化することを検討しているところである。

３．新年度の新たな取組について

「在校生・大学職員・卒業生が広く交流できる場を何らかの形で設けたい」という大学の方からの提案について、新年度の総会において、現役学生の代表者や、卒業10周年などの節目の年を迎えた卒業生のホームカミング的な参集により、同窓会への意見をいただいたり、講演会・ミニコンサート・懇親会をともに過ごし、在学生・大学職員・同窓会の絆を更に深めていくことについて、出席者の賛同を得て今後、理事会役員会で企画を検討していくこととなった。

松永　章（Ｓ59年卒・育種）

編集後記

同窓生諸氏におかれましては、新しい年平成26年をお元気でお迎えのことと存じます。農学部同窓会から、新年のご挨拶として「ありあけ」13号をお届けいたします。

前号会報発行（平成25年７月）後、母校には旧制佐賀高等学校以来の本学各学部同窓生諸氏並びに多方面の方々からの寄付金で、平成25年10月に佐賀大学付属「佐賀大学美術館」が開館しました。地域でも話題になり、開館２ヶ月足らずで１万人の入館者があったと報じられています。

思えば、「文化」は「カルチャー」の日本語変換で、農耕の「耕す」が語源です。日々の暮らしに不可欠な食糧の「生産・輸送・備蓄」が先人たちのたゆまぬ技術革新によって、また海外からの輸入も加わって、やや過剰な食糧供給が続いています。そのためか、国内での食糧生産に携わる農業者は減少し、高齢化が進んでいます。

森と農地（食糧）と治水をおろそかにした国家は滅んだことが、歴史に刻まれています。日本の大学で自前の美術館が創設されたのは２番目との栄誉を慶ぶと共に、文化の原点である「農耕文化」への新たな視座、その革新への思いを感じます。

最後になりましたが、会報「ありあけ」13号に玉稿を賜った方々にお礼申し上げます。次号の発行は平成26年７月１日です。多くの方々からのお便りをお待ちしております。そして、この会報が同窓生諸氏の絆を深め、あらたな絆が拡がるように祈念しております。

編集担当・村岡　実（Ｓ46年卒・植物保護）